

## 第 230 回 木を勉強する会 ミニシンポジウム「漆産業の未来を語ろう」

2020 年 (令和 2 年) 1 月 16 日 (木) 午後 3 時から、盛岡市内のホテルロイヤル盛岡にて、第 230 回木を勉強する会が岩手県森林・林業会議との共催で開催された。

今回は「漆産業の未来を語ろう！～漆掻き伝統技術とサイエンスの融合を目指して～」をテーマに、ミニシンポジウム形式で、岩手大学関野教授がコーディネーターを務め、3 名の講師から講演をいただいた。講演内容を以下の通り紹介する。

### 1 シンポジウムの趣旨説明 (岩手大学農学部 教授 関野 登)

漆は縄文時代から利用されており、函館から約 9000 年前の被葬者の衣服の装飾糸 (赤色顔料ベンガラを用いた 3 層漆塗りの糸) が出土している。また、約 6,500～7,000 年前には、素地 (胎) に下地・上塗りを施した本格的な漆器とその道具が出現している。漆の用途としては、矢じりを固定する接着剤、装飾や保護目的の塗料などが挙げられ、漆の利用は脈々と現代まで続いており、日本各地に 17 の漆器の産地組合がある。

岩手県の漆生産量は日本の 7 割を占め、この貴重な資源を基とした漆産業は、すそ野が広く大きな可能性を秘めている。漆産業は、ウルシ植林による資源拡大、漆液採取への新技術導入と漆液の高付加価値化、樹木の総合利用 (葉の抽出物、実、木材) による雇用創出、観光促進など地域振興の一助となりえる。そのためには、漆に関わる情報の共有が重要としてシンポジウムを開催した。

### 2 ウルシという樹木の特性 (岩手大学農学部 教授 真坂 一彦)

ホンウルシ (以下、ウルシ) の学名の意味は「毒の木」で、かぶれることが由来である。かぶれの原因はウルシオールである。原産地は中国揚子江の中上流域と考えられ、縄文時代に日本へ渡来し栽培されていたものと思われる。本県にあるウルシの仲間は、ヤマウルシ、ヌルデ、ツタウルシなどで、これらも樹液は採れるが、ホンウルシほど採れないので、漆採取の対象となっていない。

ウルシは雌雄異株で、白くて目立たない雄花、雌花が咲き、蜜を採取することができる。種子は硬実種子といわれ、難透水性の種皮により、実生の成長に適した水分・温度環境を与えても発芽しない。したがって、種子は発芽促進のため、傷を付けたり、濃硫酸処理、煮沸処理が施される。また、「しいな (稔実不良の種子)」も多く発芽率が低い。

一方、ウルシは萌芽能力があり、植栽しなくても更新可能で成長が早いという長所を有する。しかし、遺伝的に同一系統が多い場合、病虫害で全滅するリスクも高くなる。ウルシ林の造成に向けては、萌芽更新で優良家系を選抜すると同時に、遺伝的多様性の確保のため種子更新を併用することが重要である。

「しいな」の少ない充実種子生産には、受粉成功の促進が必要である。そのためにミツバチの利用を検討した。林内に蜂場を設置し、蜂場とウルシの距離が「しいな率」に及ぼす

影響を調査した。その結果、花序が大きいと「しいな率」は減少し、さらに蜂場からの距離に近いほど、「しいな率」は減少方向に変動した。養蜂業と漆産業連携により、ウルシ林—種子採取—ハチミツのつながりが期待できる。

### 3 漆掻きの伝統技法と国産漆を取り巻く状況変化（株式会社小西美術工藝社 取締役 漆生産部門総責任者 福田 達胤）

（株）小西美術工藝社は日光東照宮陽明門や中尊寺金色堂など国宝、重要文化財の装飾修復を行っており、国産漆を日本一使用している。そこで平成 28 年に漆生産部門を設立し、漆掻き技術者育成、ウルシ林造成に着手した。

漆掻きは専用のカンナで幹に傷を付け、滲み出た漆をヘラで掻き採るものであるが、江戸後期の文献と同様の方法であり、少なくとも 160 年以上は今の方法で行われてきた。漆の採取に適した樹は樹齢 15 年、胸高直径は 12cm 以上が目安となる。ウルシは農家等から立木を購入するが、原木の価格は 2,000 円/本が相場となっている。

漆掻きは、1 シーズンでウルシ立木 1 本あたり 21~22 辺の傷を付けて採取する。漆掻きは 6 月中旬頃から始まり、掻き採る時期で用途と名称が異なる。最初に採れる漆は水分が多く拭き漆に利用される「初漆（ハツウルシ）」、7月下旬から8月下旬に採れる漆は品質が良く上塗り・仕上げに利用される「盛漆（サカリウルシ）」、9月上旬から10月中旬に採れる粘度が高い「末漆（スエウルシ）」、10月下旬から11月中に採れる粘度が高く建築用下地に利用される「裏目漆」と分類され、掻き終えたウルシは荒伐採される。これら漆は荒



写真1 漆掻きの道具



写真2 漆掻きの様子

味漆として、相場 52,000 円/kg 程度で流通する。その後、荒味漆は精製され文化財修復、漆器製造に用いられる。

(株)小西美術工藝社では、漆を多く利用するため、自社で漆掻き技術者を 6 名育成しているところであるが、今年も 2 名採用を予定している。また、自社ウルシ林造成のため、3 年前から苗木生産に着手し、専用コンテナ容器を用いたウルシ苗の生産に成功した。展葉後の苗木を遊休農地へ試験植栽したところ、活着率は 100%であった。今後は耕作放棄地の再利用としてウルシ林の造成に取り組む予定。

漆は掻き採った後、幹を 1 周する傷を付ける「止掻き」を行う伝統的採取方法「殺し掻き法」が主流とされるが、ウルシは発芽率が低いといわれており（圃場発芽率は 1~30%の年変動有）、ウルシ資源の確保に課題がある。そこで、過去に漆が採取され、止掻きが行われていないウルシ（二歳木）を対象に、漆掻きを試行した。「二歳木は漆が出ない」と言われていたが、漆採取量、品質に問題はなかった。このことから、本格的な実証試験に着手したところである。

#### 4 新たな漆のビジネスモデル（株式会社浄法寺漆産業 代表取締役 松沢 卓生）

株式会社浄法寺漆産業では、これまで、漆の精製販売、漆器販売を行ってきた。これまでは、漆の需要が少なく利用拡大がテーマであったが、文化財修復の関係で漆が不足する状況となっている。漆を取り巻く状況としては、先般の首里城消失による急激な需要増加への対応、中国での漆生産の人材不足、文化財修復分野と漆器生産など民生利用分野への漆供給と課題が多い。漆生産者にとって、文化財修復用の安定的な需要は安心材料であるが、新たな分野へのチャレンジも必要と考えている。

ウルシ資源の面では、低い種子発芽率を向上させる研究が必要であるとともに、苗木の増産、植栽面積の拡大が必要となる。発芽率向上については試験研究機関との連携、植栽面積の拡大については、NPO 法人の立ち上げや関係協会の設立を進め、ウルシ産地を全国に増やす取組に着手した。現在は、青森県、福島県、岩手県でウルシ植林を進めている。

漆採取の方法は基本的に江戸時代から変わらない殺し掻きが行われているが、現在のテクノロジーを活用した漆採取の近代化について情報収集・研究に取り組んでいる。中国では、漆採取と類似するゴム採取について専用の機械を開発しており、漆採取に応用ができないか検討している。また、細いウルシ丸太を衝撃波で破碎し、漆液を圧搾・抽出する研究を沖縄高専と行っているところである。

漆はこれまで伝統的な素材として扱われてきたが、非石油系であり循環型資源として活用可能と考えている。漆を用いカード（クレジットカードの基材）も作ることができるため、脱石油製品の機運の中で、プラスチック代替素材の可能性も感じている。漆は手間のかかる資源であるが、不足する漆を補うというスタンスにとどまらず、先端技術の導入により、漆を積極的に増産し、漆産業を再興、国内外へ展開すべきと考えている。